

この半世紀の歴史を振り返れば、ビデオからインターネットまで新技術が登場するとき、それらは常に芸術の未知なる可能性を切り開いてきた。ITを遙かに凌ぐ速度で成長する21世紀初頭のバイオテクノロジーも例外ではない。

金魚、盆栽などの育種、味噌やチーズといった発酵、家畜や野菜にみられる品種改良とは違い、合成生物学を代表とする新たなバイオテクノロジーは、いままさに社会の伝統的な価値観と対峙している。苛烈な論争の最前線には、ゲノム編集や遺伝子ドライブなど多くの生物のDNAを正確に組み換え、生態環境を激変させる技術があり、それらが私たちにどのような利益と損害をもたらすかは前代未聞だ。しかし、その活用と議論の範囲は医療と農業が中心で、文化全般や社会制度、そこから形作られる我々の意識にいかん影響を与えるかはまだ検証されていないに等しい。

しかし、芸術に目を向ければ、アーティストたちは、文字通りの意味で「バイオメディア生きた」素材を用い、近年までは不可能だったアイデアと形式を発明していることに気がつく。バイオアート、ジェネティック・アート、クリティカル・デザインなどと呼ばれる動向が、社会に要請される形で徐々に勢力を増し、自然と人類の新たな関係について次々と問題を提起している。また、生命を素材として操作・改変することは、神話が描いた鶴やキメラなど「合成生物」という古典的なモチーフを、想像ではなく、現実のものとして新たな形で召還し、ルネサンス以来の「神としての芸術家像」の問題をより過激な形で呼び起こすことになるだろう。

この黎明期に立ち現れつつある芸術の潮流と対峙するときに生まれる課題を明確化したのが、2007年にMITプレスから出版された『Signs of Life』である。バイオアートの理論を

網羅的にまとめた論集として英語圏では不可欠な参照項となっているため、日本でも議論を共有すべく、この中から主に方法論や制度論において今後重要になるであろう論考2本を訳出した。本特集は、この2本を各論として、これまで日本ではほぼ研究されてこなかった現代思想「トランスヒューマニズム超人間中心主義」と、『Signs of Life』以後の問題を踏まえたバイオアートの総論的論考2本を加えた、計4本の論考から成る。

まず、バイオアートの命名者にして、先駆者として今や歴史化されつつあるエドワード・カッツの文章は、活動の軌跡を辿りながら、デジタル技術からバイオテクノロジーへの移行や、新たな生命を文字通りに創造することが孕む歴史的、社会的な意味を描き出す。生体という極めて不定形で偶然性の高い素材を扱うことは、近代フォーモリズム的な形式主義に対抗するための安易な方法ではなく、むしろ近代性（人間中心主義や合理主義など）を積極的に肯定した先にある、超近代的ともいえる脱形式主義／醜歪化主義の到来を予告するものとして評価できる。

世界に近代性が満ち、高度に複雑化した科学がまるで魔法のように便利になったとき、前近代的な魔術性が超近代的なものとして蘇る、という逆説が生じる。ジュネティック・アート遺伝子芸術の先駆にしてハーバード大学研究員のジョー・デイヴィスは、脱魔術化したかのような現代に潜む前近代的な想像力と生命の本質的な怪物性を語る。神話から宇宙まで横断する詩性を湛えた作品の解説は、生命倫理や遺伝子組み換え体の取り扱いなどの現実的問題に屹立する「科学と芸術の断絶」にアーティストやキュレーターはどう向き合うべきかを示す。

このようなバイオテクノロジーや人工知能の加速度的な発達の後には現代思想の巨大な潮流「超人間中心主義」が存在する。総論のひ

とつめは、その代表的な論客で、オックスフォード大学哲学科教授ニック・ポストロムの論考である。本論考は、人間を含むあらゆる生物を改変していく抗いがたい欲望が、なぜ我々の中に生じるのかについて哲学的かつ社会学的にひも解く。純粋芸術を標榜する自閉した芸術界さえ、時代の渦巻く激流に否応なく飲み込まれることを予告し、人間性の変容といかに向き合うべきかを普遍的な視点から問い直すものと位置づけられる。

一方、筆者の論考では、芸術における生物媒体の固有の機能と美学に焦点をあてながらも、『Signs of Life』以後の問題を概観する。当館で2015年——iPS細胞開発10周年であり、クリスパー・キャスナインCRISPR-Cas9という恐るべきゲノム編集技術が全面化した年——に、美術館として世界初となるiPS細胞を用いた作品を展示した展覧会「ゴースト・イン・ザ・セルGhost in the Cell」で実際に直面したさまざまな問題を浮き彫りにし、カッツのバイオアートの定義に収まらない現状を整理した上で、その可能性を俎上に上げる。

本特集は、テーマを「バイオアート」ではなく「バイオテクノロジーと芸術」とした。素材によって芸術を区分した近代的な形式主義の中で、科学技術を使えば、なんでも「メディアアート」という様相に対する姿勢の表明である。科学を無批判に肯定し利用する芸術から距離をとり、生体というメディアが深遠な歴史と社会の文脈の中でどのような意味を帯びるのか、その意味性を超えた作品や展覧会をいかに構築しうるのかを問うものである。本特集が、21世紀というバイオテクノロジーや人工知能が台頭する時代の芸術について考えるための手がかりとなれば、これに勝る喜びはない。

(高橋洋介)